

強く、優しく、美しく

特集 農業女子を追え



農業女子プロジェクトのロゴマークは、農業に関する地図記号を使って、キラキラ輝く太陽のようなエネルギーと、女性の視点で新しい価値を生み出していくエネルギーをイメージしている



今、農業を志す女性が増えている。農林水産省の調査では、新規に就農する30歳未満の若者は、この10年で倍増。年間6千人(うち女性は半数の三千人)にまで拡大している。(参考…2010農林業センサス)

農業は「きつい」「収入が少ない」「継ぎたくない」など、若者から敬遠されていた。しかし、不況が長引いたことで、新たな就職先として注目を集めている。

女性ならではのキラリと光る着眼点や発想を取り入れ、一味違う農業を目指す女性を「農業女子」と呼ぶ。培った知恵を、企業の技術やノウハウと結び付けて、新しい商品、サービスや情報などの付加価値を生み出す「農業女子プロジェクト」は全国に波及している。

もちろん、一関にも農業女子がいる。はじける笑顔が頼もしい。

農村の変化によって、助演女優から主演女優になった彼女たち。農業女子の素顔と可能性を追った。

あい
な人 File_31
いちのせきを愛する人

農村地域づくり活動支援員

佐藤佑樹さん

Sato Yuki 31 室根町矢越

新進気鋭の空間デザイナー
想像力と創造力で夢を描く

「小学生の頃。何もなかった場所に家が建つ様子をドキドキしながら見守った」と話す佑樹さん。千厩町で育ち、空間デザインの分野に興味を持った。高校卒業後は、芸術大学に進学。後に妻となる紀子さんに出会ったのもこの頃だ。

学んだことを生かそうと、東京のデザイン会社に就職。展示空間やイベント会場のデザイン、設計を手掛けた。7年が過ぎた。仕事に不満はなかったが、いつかは地元で働きたいという思いも募った。

市のホームページから、地域おこし協力隊事業の募集を見つけた。農村で暮らしながら地域のブランド力を高めたり、地場製品の開発・販売・宣伝をしたりする総務省の事業だ。即座に応募。審査を経て、市の農村地域づくり活動支援員として室根町矢越を拠点に働くことが決まった。

東京での暮らしから一転。2013年6月から11年ぶりの農村生活が始まった。

「空家を借りて住むことが条件だったので、最初は苦労しました」と振り返る。家中を掃除し、庭を整えた。デザイナーの性か、最近では庭いじりが新たな趣味になった。「近所の人たちが、心配して見に来てくれる。採れたての野菜を持ってきてくれる。東京の暮しにはなかった温かさがある」と感慨深げ。地域へ恩返ししたい気持ちになったという。

農村地域づくり活動支援員の仕事は、市内11のモデル地域を活性化すること。

各地域からやりたいことを聞き、何ができるかを相談し合う。得意分野であるデザイン技術を生かし、のぼり、ラベル、パッケージ、チラシなどを作成。地域の魅力を市内外に発信している。また、机上だけでなく、地域イベントの企画や運営にも参画。周囲の信頼も厚い。

「地域の魅力を、どうやって掘り起こすを観察しています。視点を変えて、物事のスキマを探るとうまくいく気がする」と持論を述べる。昨年、紀子さんと結婚。二人三脚で地域に夢を描く。

Profile

1983年千厩町生まれ。千厩高等学校卒業後、東北芸術工科大学で本格的にデザインを学ぶ。東京のデザイン会社で7年間技術を磨き、現在は室根町を拠点に農村地域づくり活動支援員として、市内11カ所のモデル地域の可能性を探る。

COVER STORY

糖度20度のサクランボを摘み放題 新たな名所「川崎観光さくらんぼ園」がオープン



さくらんぼ採りを楽しむきょうだい。「甘くておいしい」とにっこり

川崎町門崎の「川崎観光さくらんぼ園」は6月13日、プレオープンを迎え、関係者らが愛情と甘味がたっぷりのサクランボを一足早く味わいました。

同園は、川崎さくらんぼ作り隊(千葉琢也隊長)が中心になり、2010年に着手。5年の努力が実を結んでオープンし

ました。千葉隊長は「新たな観光拠点を目指したい。地域に交流や元気を取り戻せれば」と開園に期待を込めました。

7月19日までの④⑤10時～15時に開園予定。佐藤錦など5種が摘み放題で、30分で中学生以上1,000円、小学生500円。道の駅かわさきでも販売する予定です。